

芸術

美・言語・人

歴史文 大災害

地域歴史資料学 大規模自然災害 代に伝えるため けた実践と理論

東アジア 漕ぎだ

「国家や領土 情報が往来する 捉えなおす」

東アジア

島尾新編 神宗世界のし を結節点に

既刊3冊 田海から 国文化館

同刊 同刊 同刊

向きには、櫻井さんと天
なりである、ということ
付言しておきたい。(かわ
なり・よしみ氏法政大名誉
教授・スペイン現代史専
攻)

★おさか・ひろ氏は作
家。中央大卒。著書にカ
デイスの赤い星「ズベ
リアの雷鳴」「重蔵始末
」「剛爺トナリ大迷走」
「バックストリート」小
説家・渡辺剛「など。一
九四三(昭和18)年生。

た極秘情報を即刻参謀本部
に打電していた大島。ま
た「イギリスのM16(海
外秘密情報部)イペリア課
長で、ソ連のスパイを兼ね
た「二重スパイ」であり、
「20世紀の最大のスパイ」
の異名をほしいままにし
ていたキム・フィリップ。さ
らに、1944年7月20日
の「ワルキューレ作戦」と
いわれたヒトラー暗殺未遂
事件に連座して逮捕され、
連合国軍の砲声が間近に

はドイツ軍が闇雲に南に
向かって走っている敗残兵
の部隊だった。パリ大使館
員と言っても、この程度の
与太情報しか持っていなか
ったようである。
本書どころか、今ペリ
アシリーズの醍醐味は、
なんといってもキパー
ンはほぼ美在の人物であ
るとい点である。あとい
は、美在しているのだが、
また存命中の場合、スパイ
という仕事の関係上美態を

れていたベルリンへ向か
う。敵の攻撃から護るため
に車の先端に小型の自置旗
を付け、夜間に無燈で北を
目指して走行する。ドイツ
に入国しアウトバトンに北

四六変型判・624頁・2415円
講談社
978-4-06-218666-7



松澤有選詩集

星またはストリップ・シヨウ

松澤有は日本現代美術史上
最重要作家の一人だが、
初期には詩人として活動
し、数百の詩を書き、複数の
同人誌で発表していた。本
書は詩人としての松澤を正
面から取り上げる初のアン
ソロジーである。一九四六
年から五三年までの七年間
に書かれた珠玉の三十一篇
を所収している。

頁を繰れば情念を観念、
性愛と死、シニフィエとシ
ニフィアン分離から来る
焦燥が「おお」という間投
詞や「よて終るる呼び掛
け」とともに響いてくる。
この詩の作者は教員後、
言語を愛しすぎて言語を殺
し、記号で描く記号詩へと
至るだろう。それはそのまま
糸の入り口のようなこと
になり、物質に情念を灯す
特異な美術家に転じるだろう。
十年後、今度は物質を愛
しすぎて物質を殺し、再び
言語で書き出すだろう。そ
れらは詩でなく「観念美術」
と称され、世界的なコンセ
プチュアル・アートの嚆矢
となるだろう。だが詩人だ
った時分の青年松澤は、そ
んな未来を知らない。

一九四九年、二十七歳の
彼は、十一篇から成る詩集
『地上の不滅』を単部だけ
がり版刷りで刊行した。う
ち二篇は中央詩壇の『詩
學』に、一篇は北園克衛が

率いる『VOU』に掲載さ
れた。
「その地の涯にひとりの
女ありて、その地の涯

に白き細き腕ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

いがかわしき心ありて、き

ろかしに傳るる胸ありて

ききのうむかし地の涯に

のろかしむか 地の 涯に
地 白き おとめ の女の
むかむかしほそ 地の
のは ひとりの女ありて
(《MANNEQUIN》に就
て)

この引用は『VOU』掲
載の散文詩内の韻文部分だ
が、どちらかというと松
澤の芸術とその後の人生の
縮図が示されていらない
か。清純なりリズムが二
ヒルがニフアムへと目
撃してゆくさまに、妙な説
得力を感じる。そして作風
もこれ以降、情念的な抒情
詩から自壊に襲われる観念詩
へと転回しはじめる。

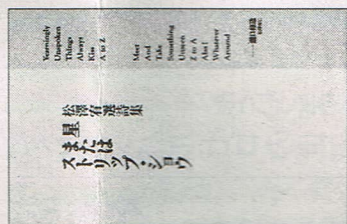
「1 死のガラス・その
九品の皿の灰 / 2 火の玉
 / 3 神・光りあれとい
たまければ光りありき /
4 0100240380
520660 80094
 / 5 とせろ / 6
泡の皿の殻・慈悲・よ
卵よ」(《砂漠の預言》)

火の玉 光り、死の灰と
くれば原爆だが、旧約の神
のみならず、せろとい
う虚無としてそれが内在化
されていることにも気づく
べきである。数字の羅列等
のシニフィアンの独り歩き
はこのニヒリズムに由来
し、タタタムを経由して

歴史上の肩書変更と二度の
自己否定を準備したはず
だ。おなみにこの時期の詩
作には「0」ばかりが羅列
されたもの、「1」と「2」
だけで構成されたもの、「一
行おきに「1」と連呼さ
れたものなどもあるが、本
アンソロジーには収録され
ていない。

いっぽう、今回確認され
た二篇の前述の詩集『地上
の不滅』はともに八篇のみ
から成り、先の引用を含む
三篇がおそらく後年の作者
自身によって落されてい
るらしい。しかし本アンソ
ロジーには賢明にも、年
一篇が収録されている。
表題書は、処女作を越え
られないという言い回しが
ある。筆書としてはおおい
れとは受け入れがたいが、
二十六、七歳時点の表現が
原点である作家は確かに数
多い。松澤有は、死の直前
まで美術家として言語を制
作し続けた。しかし彼の処
女作は間違はなく、詩人として
言語で制作したアンソ
ロジー所収の抒情詩であ
った。「首字会」を名乗る本
書の観音詩に敬意を表し
たい。(なかざわ・ひでき
氏「美術家」)

★まつざわ・ゆたか氏
(一九三二―二〇〇六)
は美術家。早大卒。第10
回(58年)から最終回(63
年)までの讀賣アンデパ
ンダン展での活動の後、
64年に言葉による美術へと
移行。著書に『言葉と
美術』など。



菊変型判・136頁・2940円
書肆山田

978-4-87995-885-3

し 過ぎない。その貴重な歌片
のきらめきを、研究の厚み
をもつて伝える一冊であ
る。(なかざわ・ひでき氏
早稲田大学教授・日本中世
文学専攻)

話に仰天した。動物
園で、カエで、女たち
の本音が飛び交うお喋り
を聞くのは楽しい。

サッチンが会議中に倒
れて心筋梗塞で入院し
た。家族でない人はど
うしただろう。ひらひら
しているヨウキさんの
台詞は素敵だ。「ともた
ちには出来ないことが
あるって今分かったわ。
サッチンと一緒にベチコ
ート入りのロンダドレス
を着てお茶を飲む」は
心に沁みだ。「夏の夕暮
れみたいなものね。また
またこれから遊べるっ
てそんな感じがしてい
る」には美感がもたら
された。場面と台詞で読
まざる臨場感、同世代
の作家ならではの筆致な
のだろう。(てらた・そ
う氏「詩人」)

★なかざわ・ひでき氏は
作家。著書に『海を感
じる時』『野ぶらちを
擁む』『女ともたち』
『豆畑の昼』『まくら
さきくれ』『暴隊のう
たき』『うさぎとトウ
ンベット』など。一九
五九(昭和34)年生。